

良渚文化石器の分類

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1624

良渚文化石器の分類

中村 慎一

はじめに

筆者らは2000年度から2002年度にかけての3年間、科学研究費補助金の助成を得て良渚文化石器に関する日中共同調査を実施した。これまでに発掘品あるいは採集品として各研究機関に収蔵されている良渚文化石器の考古学的な観察・記録・分類から出発し、石材鑑定や使用痕分析をも組み込みながら、最終的には、石器の生産と流通の機構を明らかにしようとするものである。そうした実証的研究を押し進めることではじめて、当時の社会的分業の実態を解明し、ひいては政治・経済組織を復元することも可能になるはずである。本調査の最終報告は近々中国国内で出版すべく現在準備を進めているところであるが、それに先立ち、本稿において良渚文化石器の分類試案を提示してみたい。

1、日中共同調査の概要

本論に入る前に、この日中共同調査の概要を紹介しておこう。前述の通り、この調査は科学研究費補助金により実施されたものであるが、その正式課題名は「良渚文化における石器の生産と流通に関する研究」（基盤研究 B・1、課題番号:12571030）である。調査参加者は下記の通りである（所属はいずれも当時）。

日本側：中村慎一（金沢大学）、佐川正敏（東北学院大学）、宮本一夫（九州大学）、後藤雅彦（琉球大学）、岩田修一（旭地研）、原田幹（愛知県教育委員会）、小柳美樹（駒沢大学）、岩崎厚志（国学院大学）、濱名弘二（九州大学大学院生）、村野正景（同）、松永篤知（金沢大学大学院生）、業天唯正（同）、渡辺朋恵（金沢大学学部生）、石橋克崇（同）

中国側：嚴文明（北京大学）、趙輝（同）、張弛（同）、曹錦炎（浙江省文物考古研究所）、王明達（同）、劉斌（同）、孫国平（同）、蔣衛東（同）、方向明（同）、李淋（海塩県博物館）、宋建（上海博物館）、何民華（同）、陳傑（同）、翟揚（同）、張敏（南京博物院）、丁金竜（蘇州博物館）、秦嶺（北京大学大学院生）

この調査チームの主体をなすのは1995年から1998年にかけて行われた浙江省桐郷普安橋遺跡の発掘調査に参加したメンバーである。この遺跡は良渚文化期の集落・墓地複合遺跡であるが、土器や玉器とともに少なからぬ石器も出土している。発掘を進める中で我々は出土石器に関するいくつかの重要な問題に突き当たった。それは次のようなものである。

- ①生活廃棄物層出土の石器と墓葬出土の石器では種類がまったく異なる。
- ②石器器種と石材にはかなり明確な対応関係がある。

③大量の石器が出土するにもかかわらず、遺跡周辺数十キロメートルの範囲内には石材の得られる岩山も河原も存在しない。

普安橋遺跡の発掘調査を通じて醸成されたこの共通の問題関心が今回の日中共同研究を立ち上げる原動力となった。

われわれが調査を開始した2000年夏の時点で、それまでに調査（遺物採集等も含む）された良渚文化遺跡は数百カ所に達していたはずであるが、報告書に石器の材質鑑定が掲載されたものは一遺跡しかなかった（その後、上海福泉山遺跡がそれに加わった）。その報告書とは、良渚文化の名称の由来となった良渚遺跡（群）の発見者である施昕更が1936年に出版した『良渚』である。そこでは、本来地質学を専攻していた施自身により、石器器種と使用石材との対応関係が略述されている。それから60年余り、良渚文化遺跡の発掘報告書に石材鑑定の項目が設けられることはなかった。これは第一に、この地域の新石器文化研究においては考古学と地質・岩石学との協同が石材鑑定という特殊な分野を除けば大きく立ち後れていたということに起因するが、考古学者自身に石器の流通という問題意識が欠如していた点もまた大きな要因となったことは否めない。

とは言うものの、われわれもこれまでに岩石学を本格的に勉強したことはなく、ある石材の岩石名を言い当てることなど不可能であった。そこで、岩石・鉱物鑑定の専門家として有限会社旭地研代表の岩田修一さんを研究協力者として招き、実物資料の石材鑑定をお願いすることにした。しかし、肉眼での石材鑑定は難しい。それが日頃見慣れぬ外国のものであればなおさらのことである。かといって完形の石器を壊してプレパラートを作成するわけにもいかない。岩田さんには多大な心理的ストレスを与える結果になってしまった。

また、良渚文化石器には世界の他地域で類例をみない奇妙な石器が何種類かある。「石犁」、「破土器」、「耘田器」などがそれである。その名称からわかるように、いずれも農具の一種と考えられてきたのであるが、本当にそうなのか、またそうだとした場合、具体的にはどのように使用されたのか、といった問題は未解決のまま取り残されてきた。この問題を解決するためには使用痕の顕微鏡観察と模造品を用いての実験とがどうしても必要なことは明らかである。そこで、弥生文化石器の使用痕研究の分野で業績を挙げられている愛知県教育委員会の原田幹さんにメンバーに加わってもらうことにした。重たい金属顕微鏡を背負って何回も中国まで出かけてもらったその苦勞には頭の下がる思いがする。

あと一つ忘れてならないのは、来る日も来る日も石器の実

測に明け暮れた若い諸君の活躍である。3年間でわれわれが調査した石器は2000点近くに達する。そのかなりの部分は採集品である。われわれが手を付けなければ、おそらくこれから先何十年かは日の目を見ることはないだろう。発掘品についても状況に大差はない。中国の発掘報告では報告書に載せられる遺物は出土品のごく一部にしからずすぎないことがしばしばある。多くの石器はその実態が明らかにされないまま収蔵庫の片隅に眠り続けることになる。2000点近くの石器を観察・記録したことは、それだけで大変大きな学問的成果になるものと自負している。

このような体制のもとでわれわれの調査は進められた。調査を実施した遺物収蔵機関は下記の通りである。

2000年度：浙江省文物考古研究所、良渚文化博物館、余杭市博物館、海塩県博物館、嘉興市博物館、桐郷市博物館、平湖市博物館（すべて浙江省）

2001年度：浙江省文物考古研究所、海塩県博物館、平湖市博物館、嘉興市博物館、湖州市博物館、舟山市博物館、馬嶼博物館（以上、浙江省）、上海博物館、青浦県博物館（以上、上海市）

2002年度：常熟市博物館、呉江市博物館、昆山市文物管理所、蘇州博物館、呉県文物管理委員会、常州市博物館（以上、江蘇省）、上海博物館（上海市）浙江省文物考古研究所（浙江省）

因みに、石材産地に関しては、浙江省の杭州市、余杭市、海寧市、海塩県、平湖県、徳清県、上海市の松江県、江蘇省の呉県に及ぶ約20地点で踏査を行っている。

2. 良渚文化石器の分類

さて、ここからが本題である。結論から先に述べると、良渚文化石器は20ほどの器種に分類可能である。そしてそのほとんどすべてが磨製石器である（打製石器としては玉器加工用のチャート製彫刻刀類があるが、本稿では取り上げない）。この磨製石器の多様性は、その製作の精緻さと相俟って良渚文化石器の最大の特徴となっている。磨製石器を利器として用いる文化という意味で「新石器文化」の語を用いるならば、良渚文化は世界の新石器文化の最高峰といっても過言ではないだろう。玉器の陰に隠れてこれまであまり重視されることのなかった良渚文化石器であるが、その重要性はもっと認識されてよいと思う。

以下、その20種ほどの石器器種につき分類案を提示し、タイプごとの概略について記述する。なお分類に際しては石材選択が大きなファクターとなりうるし、用途の推定に関しては使用痕の分析が重要な手がかりを提供することはいうまでもない。しかし、それらの研究成果については正式報告書において詳述することとして、本稿では形態からの分類案を提示するにとどめることを予めお断りしておく。

① 両刃石斧

伐採用と推定される斧である。断面形は左右対称となる。小さなもの（図1-1）で長さ10cm程度、大きなものでは20cm近いものもある。これまでの発見例はきわめて少ない。これは両刃石斧が墓の副葬品になることがないことにも起因しているが、一般の居住遺跡からの出土も少数であり、不可解である。

② 片刃石斧

中国考古学では石鑿と呼ばれる。形態的には大きく3類に分けられる。A式（図1-2）は有段のもので、もっとも一般的なタイプである。長大なものでは20cmを超える例品もある。そうした大型品のうち丹念に研磨されガラス光沢を有するようなものは副葬品として用いられることがある。居住遺跡から発見されるのは10cm以下の小型のものが多い。長さ、幅、厚さいずれにおいても多様である。B式（図1-3）とした無段のタイプは崧沢文化に特徴的なものであるが、良渚文化期にも若干存在する。無段のタイプのうち幅よりも厚さの厚いものをC式=鏃（図1-4）として独立させておいた。

③ 鋌

良渚文化をもっともよく特徴づける石器である。墓の副葬品として多用されるため、これまでの出土量は膨大である。ここでは8類に分けてみた。A式（図1-5）は直線的な両側縁がやや末広がりになるタイプである。円弧状を呈する刃部と側縁との境界が角張る。薄身であり、厚さ1cmに達することはまずない。B式（図1-6）は一般に「舌状」と形容されるタイプで、刃部と両側縁との境界が不明瞭である。重厚なことが特徴で、厚さは1cmないしはそれ以上ある。C式（図1-7）は平面形が台形に近く、かなり厚みがあり、台形状の稜線がはっきりと作り出されるタイプである。D式としたものはほぼ長方形を呈するタイプで、刃部の張り出しは弱い。基部が直線的なもの=D1式（図1-8）と両肩部を欠き落とすもの=D2式（図1-9）とがある。後者には、幅が広く2孔を有する例もある。E式（図1-10）は両側縁がやや内凹するタイプで、器体の大きさに比して厚さはきわめて薄い。内凹の度合いが強いものはしばしば「風字状」と表現される。F式（図1-11）は両側縁が内凹する点でE式に似るが、高さよりも幅が大きい上、刃部および両側縁が稜をもつように研ぎ出されることが特徴である。ガラス光沢が出るまで丹念に研磨されたものが少なくない。G式（図1-12）としたのは鋌の身部と柄部を一つの石で製作したもので、これまで発掘品としては例がなく、上海博物館と昆山市文物管理所の収蔵品計2点が知られるのみである。

④ 鏃

良渚文化の石鏃は基本的にすべて断面菱形である。従って、分類は基部の形態と茎の有無によって行われる。A式（図2-1）はいわゆる柳葉状を呈するタイプ、B式（図2-2）は基部近くが内側に向かって殺ぎ落とされたタイプである。この両タイプが良渚文化石鏃の大部分を占める。B式の殺ぎ落とし部分

が長大化し、矢柄への固定の便を図ったものもあるが、それをC式(図2-3)としておいた。基部が平坦ないしは内凹するタイプは多くはない。それらのうち平基で有茎のものをD式(図2-4)、凹基有茎をE式(図2-5)、凹基無茎をF式(図2-6)とした。

⑤ 多孔石刀(図2-7)

横長長方形の器身に二つ以上の孔を穿つ石器を多孔石刀と呼称する。孔の数は二つであることが多いが、三つ、四つ、五つのものもある。ふつう横幅20cm前後の大きさで、厚さは1cmを超える。収穫具ではなく、鉞と同じく武器あるいはそこから儀器に転じたものと考えられる。

⑥ 耘田器(図2-8)

V字状石刀と呼ばれることもある。孔の有無、大きさ、位置と、上縁突出部の形状とによって細分が可能であるが、その変化が漸移的であるため境界線を設定することが難しい。従来は中耕・除草具と考えられており、「耘田器」の名称が与えられていたが、使用痕の観察から示唆されるところでは、イネ科作物の収穫具である可能性が高い。なお、桐郷市博物館には表面に線刻文様が施された例品が所蔵されている。

⑦ 有柄石刀

A式(図2-9)は刃部に対して斜行する直線的な柄部をもつ。B式(図2-10)は上縁の端部ないしはやや内側につまみ状の小把手が付くタイプである。C式(図2-11)としたものは刃部と直角の位置に大きな持ち手が付くもので、「L字状」ないしは「靴形」と形容することも可能である。これら3種の有柄石刀はいずれも比較的小型・軽量である。いわゆるシッケル・グロスが認められる場合もあるが、イネ科作物の収穫専用というよりは万能のナイフと考えたほうがよいだろう。

⑧ 擦切り器(図2-12)

「半月形石刀」などと呼称されることもあるが、イネ科作物の収穫具ではなく、玉・石材を擦り切るための工具である。必ずしも半月形を呈するとは限らず、長方形等さまざまな形状のものがある。

⑨ 錘(図2-13)

良渚文化の石錘は5cm以下の小型のものが大多数であるところからみて、漁網用というよりは釣針糸用と考えたほうがよいかもしれない。しかし、不思議なことに、これまでに良渚文化遺跡からの釣針出土は報じられていない。

⑩ 砥石(図2-14)

大きさと形態はきわめて多様である。目の粗いものと細かいものがあり、前者は赤褐色、後者は灰白色を呈することが多い。形態的には据え置き型と把持型とに分けられる。いうまでもなく、前者は比較的大きく、後者は比較的小さい。日本考古学で「玉砥石」と呼ばれる、溝状の窪みをもつものもある。ただし、そのタイプも玉器加工専用とは限らず、骨角器や小型石器類の研磨にも用いられたものと考えられる。

⑪ 穿孔器(図2-15)

良渚文化の玉・石器の穿孔法には数種類あるが、そのうち「実心鑽」法の工具として用いられたのがこれである。器身の中部下端寄りに細い溝が削り出されるのが一般的である。ここに紐をかけ、弓錐の要領で穿孔したものと推測される。

⑫ 錐(図2-16)

手に持って回転する穿孔用具である。出土例はきわめて少ない。対象物としては木材や皮革を推定することも可能であろう。

⑬ 紡錘車(図2-17)

径7~8cmのものが多い。良渚文化の紡錘車には石製のもの以外にも土製、玉製のものがある。

⑭ 芯(図2-18)

石鉞等を「管鑽」法を用いて穿孔した際の製作残余物であるため、製品と呼ぶことはためらわれるが、石器の穿孔法を知る上で重要な資料であることからここにリストアップしておく。これまでの発見例はそれほど多くはない。

⑮ 鋤(図2-19)

一見するとD2式石鉞に似るが、孔が穿たれていないこと、肩部の欠き込みが大きく着柄部を意識的に作り出していると思われること、そして、全体の製作が粗雑であることから鉞とは区別される。縦方向に柄を取り付けて鋤として使用したものと想定される。出土は散発的であるが、上海市西部から江蘇省東部にやや目立つ。

⑯ 鎌(図3-1)

刃部幅5cmほどの小型品から30cmに達する大型品まで大きさはまちまちであるが、20cm前後のものが多い。大きさの違いは対象植物の違いや収穫法の違い(根刈りと穂刈りなど)を反映している可能性がある。両刃と片刃の別があるが、大多数は片刃である。片刃の場合、刃の付けられた面を上にして使用したとすると左手用となるものが多いのは興味深い現象である。

⑰ 犁

大きさと形態にはバリエーションがある。長さに関していうと、十数cmのものから60cmに達するものまで開きは大きい。この形態差はおそらく時期差を反映したものであると思われる。出現期においては正三角形に近い小型品で後端中央に浅いくり込みが入るタイプ(図3-3)が主体となる。孔の数は三つ以内である。時期が降ると細長い二等辺三角形へと変化していく。孔も中軸線上に一列に並ぶようになる。このタイプでは、背面の中軸線の位置に幅7~8cm程度の擦痕が認められることが多い。木製の犁台に装着した際の痕跡であることは確かであるが、木台そのものの痕跡であるのか木台との間にかませた別素材のもの痕跡であるのかは判然としない。なお、近年桐郷新地理遺跡において「組み合せ式」とも呼ぶべきタイプの存在が明らかになった。正三角形に近い先端部とその後方両翼部の側板とが別作りになったものである。こうした型式が一般的であったとすると、正三角形に近い小型のものは

時期的に古いものではなく、単に組み合わせ式の先端部であった可能性も出てくる。一方、両翼に位置する側板は細長い不整形長方形で、2孔が穿たれている。そのような器物(図3-2)はこれまでも出土例は少なくなかったが、多孔石刀の一種かと漠然と考えられていた。今回の発見でその用途が判明したわけである。

⑱ 破土器

A式(図3-4)は三角形破土器と称されるタイプで、不等辺三角形の長い方の斜辺の延長方向に柄部が伸びる。その端部中央にくり込みが入るのが一般的である。一方のB式(図3-5)はV字状破土器と称されるタイプで、短い方の斜辺に深い抉りが入ることから全体形がV字に見える。こちらでは長い方の斜辺の端部上面が四角く欠き取られるのが普通である。この両者の形態の違いは着柄法の違いに由来するものといえるが、それがさらに機能や対象物の違いまで反映するものなのかどうかは今のところわからない。刃の付け方は片刃のものが多い。この器物の名称は溝を切るための道具と考えられたところに由来するが、使用痕の観察所見ではいわゆるシックル・グロスが認められることから、イネ科植物を対象とした何らかの作業に用いられた可能性も出てきた。「破土器」の名称は再考を要するかもしれない。

⑲ 凸字状石刀(図3-6)

形態は破土器に似るが、上縁中央に柄が付き、全体が左右対称の凸字状になる。刃部以外には剥離面を残すことが多く、製作はやや粗雑である。切断工具の一種であることは間違いないが、その具体的使用法は不明である。

⑳ その他

その他としては、三角形刺突具、槍先、スクレーパーなどがあるが、例数はきわめて少なく、一般的に使用された器物であったかどうか疑わしい。その上、他器物の破損品を再利用したものもあるため、ここでは定型的な独立器種とは認定しなかった。

おわりに

以上が良渚文化石器の分類試案である。おおかたは従来の分類案に沿うものではあるが、穿孔器、擦切り器、石犁側板など新たな提案も含まれている。また、本稿では詳しく触れることはできなかったが、器種と石材との対応関係を加味したことでより踏み込んだ分類が可能となった部分もある。石鉞がその代表といえる。さらには、金属顕微鏡観察を実施したことで、憶測の域を出なかった従来の使用法復元に大きく変更を迫ることにもなった。耘田器、破土器などがその例である。これらの器種の名称については、今後中国語としても通りのよいものを提唱していきたいと考えている。なお、今回は玉器加工用石器についてはほとんど言及することができなかった。また、良渚文化石器全般について、時期差、地域差、石材選択、石材産地などについてもその詳細は割愛せざる

るをえなかった。それらについては正式報告書において考察を加える予定であることを付言しておく。

最後に、本調査については以下2篇の紹介文がすでに刊行されている。併せてご覧いただければ幸いである。

【文献】

中村慎一「良渚文化石器に関する日中共同調査」『中国考古学』第2号、2002年。

原田幹・中村慎一・小柳美樹「良渚文化石器の使用痕分析」『中国考古学』第3号、2003年。

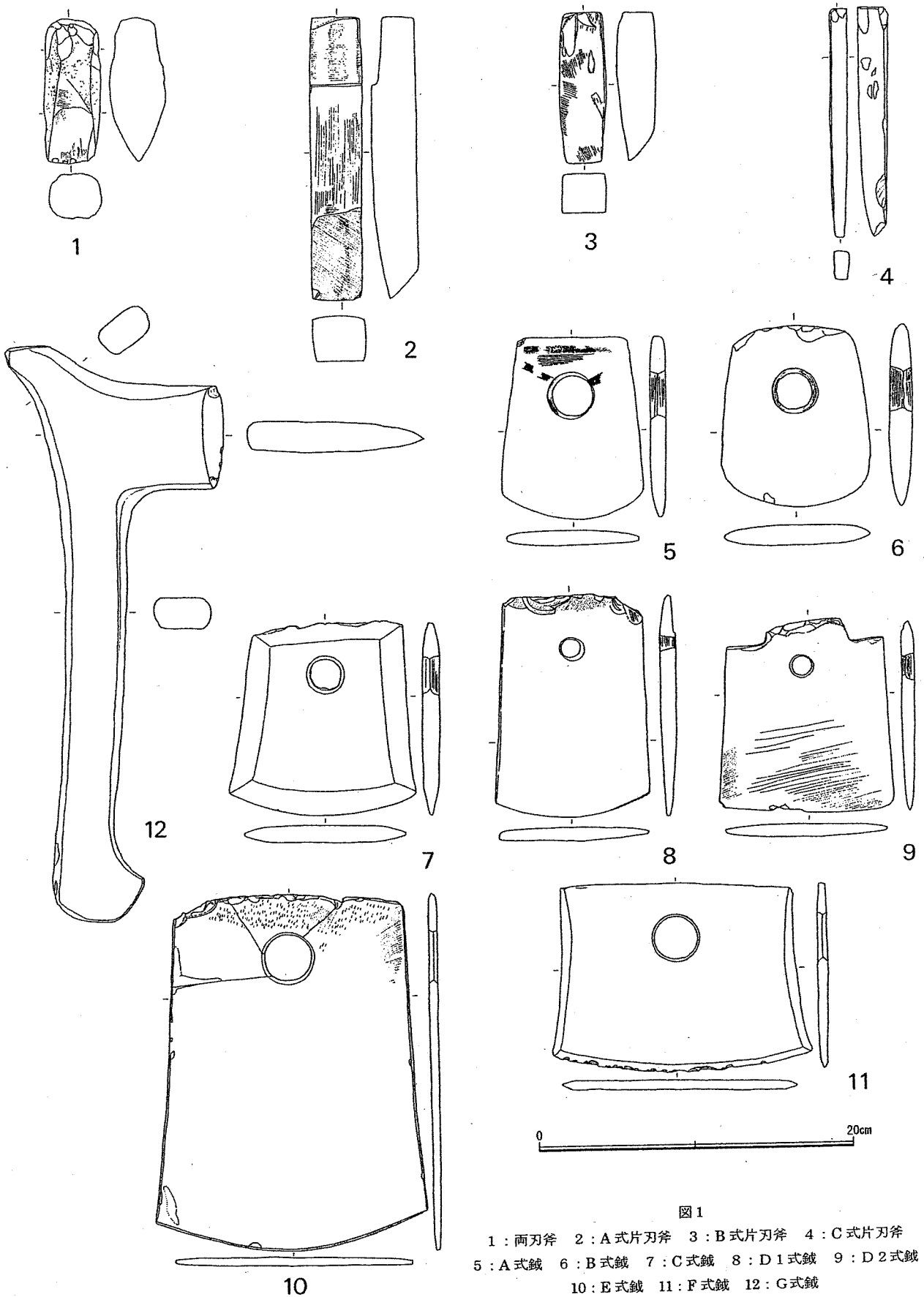


図1

- 1: 両刃斧 2: A式片刃斧 3: B式片刃斧 4: C式片刃斧
 5: A式鉞 6: B式鉞 7: C式鉞 8: D1式鉞 9: D2式鉞
 10: E式鉞 11: F式鉞 12: G式鉞

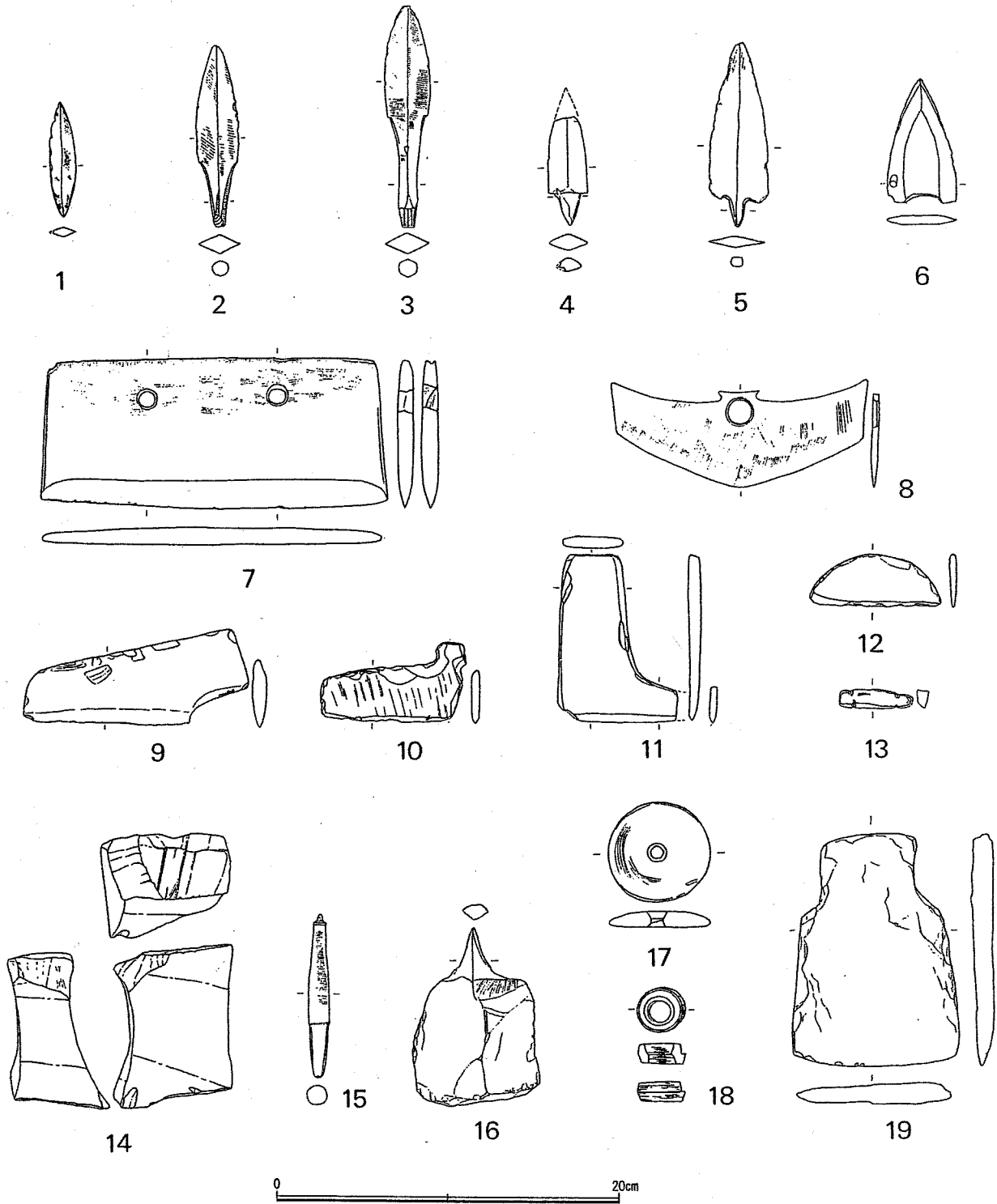


図2

1 : A式鏃 2 : B式鏃 3 : C式鏃 4 : D式鏃 5 : E式鏃 6 : F式鏃 7 : 多孔石刀
 8 : 耘田器 9 : A式有柄石刀 10 : B式有柄石刀 11 : C式有柄石刀 12 : 擦切り器
 13 : 錘 14 : 砥石 15 : 穿孔器 16 : 錘 17 : 紡錘車 18 : 芯 19 : 鋤

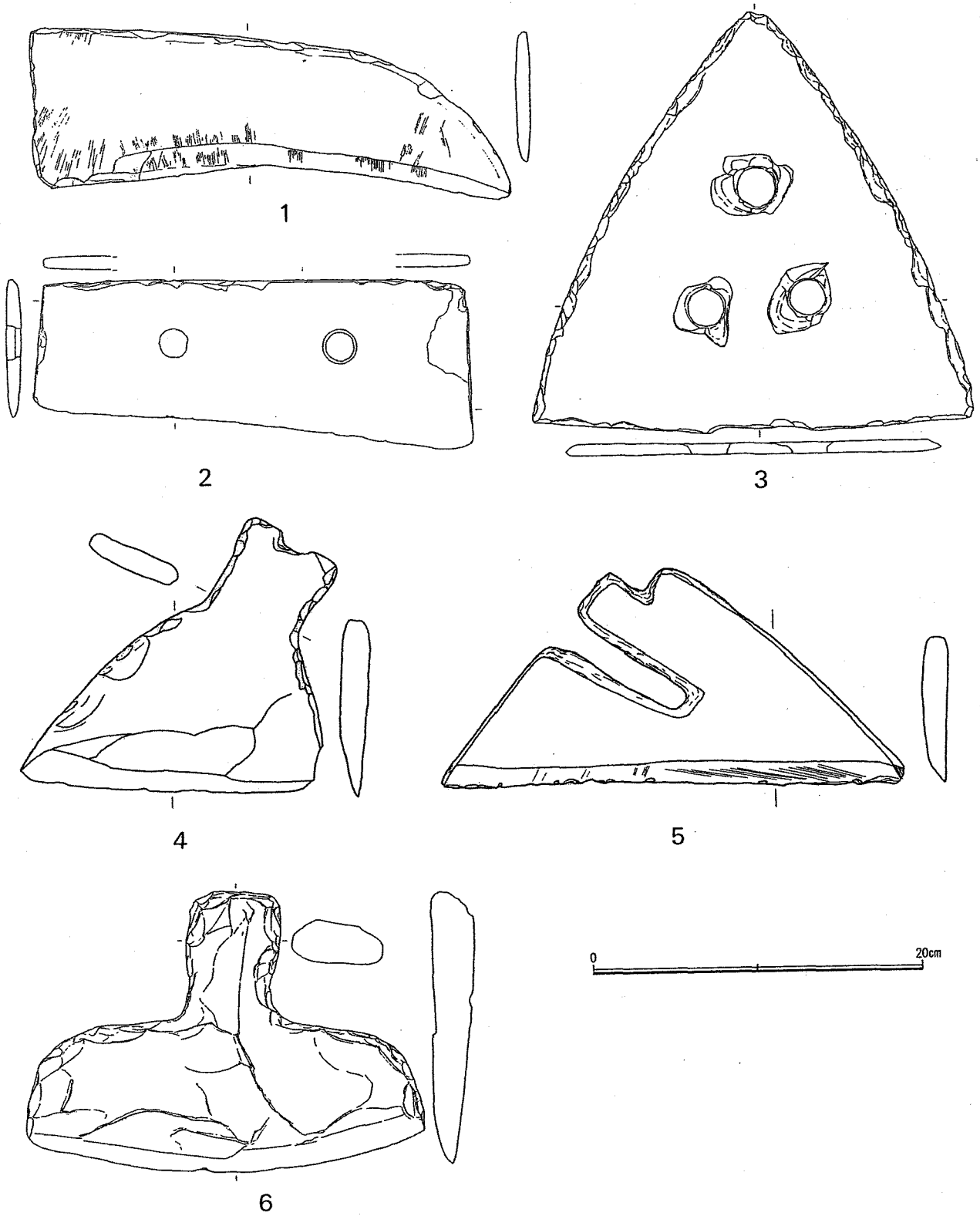


図3

1: 鎌 2: 犁側板 3: 犁本体 4: A式破土器 5: B式破土器 6: 凸字状石刀